

手紙

芥川龍之介

青空文庫

僕は今この温泉宿に滞在しています。避暑する気もちもありません。しかしまだそのほかにゆつくり読んだり書いたりしたい気もちもあることは確かです。ここは旅行案内の広告によれば、神経衰弱に善いとか云うことです。そのせいか狂人も二人ばかりいます。一人は二十七八の女です。この女は何も口を利かずに手風琴ばかり弾いています。が、身なりはちゃんとしていますから、どこか相当な家の奥さんでしょう。のみならず二度見かけたところではどこかちよつと混血児じみた、輪廓の正しい顔をしています。もう一人の狂人は赤あかと額の禿げ上った四十前後の男です。この男は確か左の腕に松葉の入れ墨をしているところを見ると、まだ狂人にならない前には何か意気な商売でもしていたものかも知れません。僕は勿論この男とは度たび風呂の中でも一しよになります。K君は（これはここに滞在しているある大学の学生です。）この男の入れ墨を指さし、いきなり「君の細君の名はお松さんだね」と言ったものです。するとこの男は湯に浸ったまま、子供のように赤い顔をしました。……

K君は僕よりも十も若い人です。おまけに同じ宿のM子さん親子とかなり懇意にしている人です。Mさんは昔風に言えば、若衆顔をしていると言っても言うのでしよう。僕はM

子さんの女学校時代にお下げに白い後ろ鉢巻をした上、薙刀を習ったと云うことを聞き、定めしそれは牛若丸か何かに似ていたことだろうと思いました。もつともこのM子さん親子にはS君もやはり交際しています。S君はK君の友だちです。ただK君と違うのは、——僕はいつも小説などを讀むと、二人の男性を差別するために一人を肥つた男にすれば、一人を瘠せた男にするのをちよつと滑稽に思っています。それからまた一人を豪放な男にすれば、一人を纖弱な男にするのにもやはり微笑まづにはいられません。現にK君やS君は二人とも肥つてはいないのです。のみならず二人とも傷き易い神経を持つて生まれているのです。が、K君はS君のように容易に弱みを見せません。實際また弱みを見せない修業を積もうともしているらしいのです。

K君、S君、M子さん親子、——僕のつき合っているのはこれだけです。もつともつき合いと言つたにしろ、ただ一しよに散歩したり話したりするほかはありません。何しろここには温泉宿のほかに（それもたつた二軒だけです。）カッフエ一つないのです。僕はこゝう云う寂しさを少しも不足には思つていません。しかしK君やS君は時々「我等の都会に対する郷愁」と云うものを感じています。M子さん親子も、——M子さん親子の場合は複雑です。M子さん親子は貴族主義者です。従つてこゝう云う山の中に満足している訣はあり

ません。しかしその不満の中に満足を感じているのです。少くともかれこれひとつき一月だけの満足を感じているのです。

僕の部屋は二階の隅にあります。僕はこの部屋の隅の机に向かい、午前だけはちやんと勉強します。午後はトタン屋根に日が当るものですから、その烈しい火照りほてだけでもどうい本などは読めません。では何をするかと言えば、K君やS君に来て貰もらつてトランプや将棊しょうぎに閑ひまをつぶしたり、組み立て細工ざいくの木枕きまくらをして（これはこの名産です。）昼寝をしたりするだけです。五六日前の午後のことです。僕はやはり木枕をしたまま、厚い渋紙の表紙をかけた「大久保武蔵おおくほむさしあぶみ鐙」を読んでいた。するとそこへ襖ふすまをあけていきなり顔を出したのは下の部屋にいるM子さんです。僕はちよつと狼狽ろうばいし、莫迦ばか莫迦ばかしいほどちやんと坐り直しました。

「あら、皆さんはいらっしゃいませんの？」

「ええ。きようは誰も、……まあ、どうかおはいりなさい。」

Mさんは襖ふすまをあけたまま、僕の部屋の縁えん先に佇たたずみました。

「この部屋はお暑うございますわね。」

逆光線になったMさんの姿は耳だけ真紅しんくに透すいて見えます。僕は何か義務に近いもの

を感じ、M子さんの隣に立つことにしました。

「あなたのお部屋は涼しいでしょう。」

「ええ、……でも手風琴てふうきんの音ばかりして。」

「ああ、あの気違いの部屋の向うでしたね。」

僕等はこんな話をしながら、しばらく縁先に佇んでいました。西日にしびを受けたトタン屋根は波がたにぎらぎらがやいています。そこへ庭の葉桜はぎくらの枝から毛虫が一匹転げ落ちました。毛虫は薄いトタン屋根の上にかすかな音を立てたと思うと、二三度体をうねらせたぎり、すぐにぐったり死んでしまいました。それは実に呆あつ気ない死です。同時にまた実に世話の無い死です。――

「フライ鍋の中へでも落ちたようですね。」

「あたしは毛虫は大嫌いだいきらい。」

「僕は手でもつまめますがね。」

「Sさんもそんなことを言っていらいっしやいました。」

M子さんは真面目まじめに僕の顔を見ました。

「S君もね。」

僕の返事はM子さんには気乗りのしないように聞えたのでしよう。(僕は実はMさん
に、——と云うよりもMさんと云う少女の心理に興味を持っていたのですが。) M子
さんは幾分か拗ねたようにこう言つて手すりを離れました。

「じやまた後のちほど。」

M子さんの帰つて行つた後のち、僕はまた木枕きまくらをしながら、「大久保武蔵おおくぼむさしあぶみ」を讀みつ
づけました。が、活字を追う間あいだに時々あの毛虫のことを思い出しました。……

僕の散歩に出かけるのはいつも大抵たいていは夕飯前ゆうめしまえです。こう云う時にはM子さん親子を
はじめ、K君やS君も一しよに出るのです。そのまた散歩する場所もこの村の前後二三町
の松林よりほかにはありません。これは毛虫の落ちるのを見た時よりもあるいは前の出来
事でしょう。僕等はやはりはしやぎながら、松林の中を歩いていました。僕等は？——も
つともM子さんのお母さんだけは例外です。この奥さんは年よりは少くとも十とおぐらいはふ
けて見えるのでしよう。僕はM子さんの一家のことは何も知らないものの一人です。しか
しいつか讀んだ新聞記事によれば、この奥さんはM子さんやM子さんの兄にいさんを産んだ人
ではないはずです。M子さんの兄さんはどこかの入学試験に落第したためにお父さんのピ
ストルで自殺しました。僕の記憶を信ずるとすれば、新聞は皆兄さんの自殺したのもこの

後妻ごさいに來た奥さんに責任のあるように書いていました。この奥さんの年をとつてゐるものもあるいはそんなためではないでしょうか？ 僕はまだ五十を越してゐないのに髪かみの白い奥さんを見る度にどうもそんなことを考えやすいのです。しかし僕等四人だけとはとにかくしやべりつづけにしやべつていました。するとM子さんは何を見たのか、「あら、いや」と言つてK君の腕を抑えました。

「何です？ 僕は蛇へびでも出たのかと思つた。」

それは實際何でもない。ただ乾いた山砂の上に細こまかい蟻ありが何匹も半死はんし半生はんしょうの赤蜂あかはちを引きずつて行こうとしていたのです。赤蜂は仰あおむけになつたなり、時々裂さけかかつた翅はねを鳴らし、蟻の群を逐おひ払つています。が、蟻の群は蹴け散ちらされたと思うと、すぐにまた赤蜂の翅や脚にすがりついてしまふのです。僕等はそのに立ちどまり、しばらくこの赤蜂のあがいてゐるのを眺めていました。現にM子さんも始めに似合にあわず、妙に真剣な顔をしたまま、やはりK君の側に立つていたのです。

「時々劍けんを出しますわね。」

「蜂の劍は鉤かぎのように曲つてゐるものですね。」

僕は誰も黙つてゐるものですから、M子さんとこんな話をしていました。

「さあ、行きましよう。あたしはこんなものを見るのは大嫌い。」

M子さんのお母さんは誰よりも先きに歩き出しました。僕等も歩き出したのは勿論です。松林は路をあましたまま、ひっそりと高い草を伸ばしていました。僕等の話し声はこの松林の中に存外ぞんがい高い反響を起しました。殊にK君の笑い声は——K君はS君やM子さんにK君の妹さんのことを話していました。この田舎いなかにいる妹さんは女学校を卒業したばかりらしいのです。が、何でも夫になる人は煙草ものまなければ酒ものまない、品行方正の紳士でなければならぬと言っていると云うことです。

「僕等は皆落第ですね？」

S君は僕にこう言いました。が、僕の目にはいじらしいくらい、妙にてれ切った顔をしていました。

「煙草ものまなければ酒ものまないなんて、……つまり兄貴あにきへ当てつけているんだね。」

K君も咄嗟とつさにつけ加えました。僕は善い加減かげんな返事をしながら、だんだんこの散歩を苦にし出しました。従つて突然M子さんの「もう帰りましよう」と言った時にはほつとひと息ついたものです。M子さんは晴れ晴れした顔をしたまま、僕等の何なんとも言わないうちにぐるりと足を返しました。が、温泉宿へ帰る途中はM子さんのお母さんとばかり話してい

ました。僕等は勿論前と同じ松林の中を歩いて行つたのです。けれどもあの赤蜂はもうどこかへ行つていました。

それから半月ばかりたつた後です。僕はどんより曇っているせいか、何をする気もなかつたものですから、池のある庭へおりて行きました。するとM子さんのお母さんが一人ふなそこいす船底椅子に腰をおろし、東京の新聞を読んでいた。MさんはきようはK君やS君と温泉宿の後ろにあるY山へ登りに行つたはずで、この奥さんは僕を見ると、老眼鏡ろっかんきようをはずして挨拶あいさつしました。

「こちらの椅子いすをさし上げましょうか？」

「いえ、これで結構です。」

僕はちようどそこにあつた、古い籐椅子とういすにかけることにしました。

「昨晚はお休みになれなかつたでしょう？」

「いいえ、……何かあつたのですか？」

「あの気の違つた男の方がいきなり廊下ろうかへ駈け出したりなすつたものですから。」

「そんなことがあつたんですか？」

「ええ、どこかの銀行の取りつけ騒ぎを新聞でお読みなすつたのが始まりなんですつて。」

僕はあの松葉の入れ墨すみをした気違いの一生を想像しました。それから、——笑われても仕かたはありません、僕の弟の持つている株券かぶけんのことなどを思い出しました。

「Sさんなどはごぼしていらつしやいましたよ。……」

M子さんのお母さんはいつか僕に婉えんきよく曲まがにS君のことを尋ね出しました。が、僕はど
う云う返事にも「でしょう」だの「と思います」だのとつけ加えました。（僕はいつも一
人ひとりの人をその人としてだけしか考えられません。家族とか財産とか社会的地位とか云うこ
とには自然と冷淡になつていゝのです。おまけに一番悪いことはその人としてだけ考える
時でもいつか僕自身に似ていゝ点だけその人の中から引き出した上、勝手に好悪こうおを定め
ていゝのです。）のみならずこの奥さんの気もちに、——S君の身もとを調べる気もちにあ
る可笑おかしさを感じました。

「Sさんは神経質でいらつしやるでしょう？」

「ええ、まあ神経質と云うのでしよう。」

「人ずれはちつともしていらつしやいませんね。」

「それは何しろ坊ちゃんですから、……しかしもう一ひとつとお通りのことは心得ていると思いま
すが。」

僕はこう云う話の中にふと池の水際みずぎわに沢蟹さわがにの這はっているのを見つけました。しかもその沢蟹はもう一匹の沢蟹を、——甲羅こうらの半ば砕けかかったもう一匹の沢蟹をじりじり引きずって行くところなのです。僕はいつかクロポトキンの相互扶助論そうごふじょろんの中にあつた蟹の話はなを思い出しました。クロポトキンの教えるところによれば、いつも蟹は怪我けがをした仲間仲間を扶たすけて行たすつてやると云うことです。しかしまたある動物学者の実例を観察したところによれば、それはいつも怪我けがをした仲間を食うためにやっていると云うことです。僕はだんだん石せき 菖しょうのかげに二匹の沢蟹の隠れるのを見ながら、M子さんのお母さんと話していました。が、いつか僕等の話に全然興味を失っていました。

「みんなの帰かえつて来るのは夕ゆふがたでしよう？」

僕はこう言いつて立ち上ありました。同時にまたM子さんのお母さんの顔にある表情を感じました。それはちよつとした驚おどろきと一しよに何か本能的な憎にくしみを閃ひらめかせている表情です。けれどもこの奥おくさんはすぐにももの静しずかに返事こたへをしました。

「ええ、M子もそんなことを申まをしておりました。」

僕は僕の部屋へ帰かえつて来ると、また縁えん先さきの手すりにつかまり、松林の上に盛り上あつたY山の頂いただきを眺ながめました。山の頂は岩むらの上に薄い日の光をなすっています。僕はこう云

う景色を見ながら、ふと僕等人間を憐みたい気もちを感じました。……

M子さん親子はS君と一しよに二三日前に東京へ帰りました。K君は何でもこの温泉宿へ妹さんの来るのを待ち合せた上、(それは多分僕の帰るのよりも一週間ばかり遅れるでしょう。) 帰り仕度をするとか云うことです。僕はK君と二人だけになった時に幾分か寛ぎを感じました。もつともK君を劬りたい気もちの反ってK君にこたえることを惧れているのに違いありません。が、とにかくK君と一しよに比較的气楽に暮らしています。現にゆうべも風呂にはいりながら、一時間もセザール・フランクを論じていました。

僕は今僕の部屋にこの手紙を書いています。ここはもう初秋にはいつています。僕はけさ目を醒ました時、僕の部屋の障子の上に小さいY山や松林の逆さまに映っているのを見つけました。それは勿論戸の節穴からさして来る光のためだったのです。しかし僕は腹ばいになり、一本の巻煙草をふかしながら、この妙に澄み渡った、小さい初秋の風景にいつにない静かさを感じました。…………

ではさようなら。東京ももう朝晩は大分凌ぎよくなっているでしょう。どうかお子さんたちにもよろしく言つて下さい。

(昭和二年六月七日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年2月3日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

手紙

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>